

「施設整備は財政上困難。全国基準を緩和し『ケア付すまい』を増やす」猪瀬直樹東京副知事

コラム1 東京都品川区 閉校になった中学校を高齢者福祉施設に改修

「既存の施設・人的資源を活用し地域に根ざす活動をつづける」大阪府・街かどデイハウス

「ひとりひとりの問題と向き合い、住み慣れたまちで最期を迎える」第二宅老所よりあい

「ホームセンターを高齢者施設に改修し、地方再生に寄与」総合ケアセンター榛名荘

「全室個室・ユニット化は絶対条件。『施設』ではなく『住まい』を提供」けま喜楽苑

「巨大施設は大量生産と同じ。介護サービスは在宅で24時間受けれる時代に」高橋紘士

コラム2 高齢者総合ケアセンターこぶし園(新潟県長岡市)の実践

厚労省=2011年までに16万人分の介護施設・地域介護の整備目標

特養ホームを良くする市民の会=特養ホーム「全室個室化」の実現を

「待機者45万人を受け入れるために国は多床室の整備を急げ」中田清

施設は、家族やコミュニティを遮断し、いわば人生の終わりを待つ「終着駅」です。高齢者が早くから安心できる「ケア付すまい」を用意することは、介護度の悪化を予防するとともに、社会保障費の軽減にもつながります(インタビュー・猪瀬直樹)。すべての施設が個室・ユニット型となつた場合、国民年金受給者はほぼ入所できない。在宅介護に代わる器として、施設の多床室を整備することは、公共の役割だと受け止めています(インタビュー・中田清)。

特集 | 21世紀型高齢者施設はこれだ!



各地域に拠点を置く設計事務所の
作品集
建築集

論評
オピニオンの視線
岡村仁「マンションロッテの一連の作品」

美しい構造設計の世界⑩
岡村仁「マンションロッテの一連の作品」



五十嵐太郎の先読み編集局 |

**「こたつ問題」
をめぐって**

市民協働で武蔵野市の
景観をつくりたい!! 邑上守正

民主党政権で環境・住宅政策が
劇的に変わる!! 山岡淳一郎

論評

岡村仁「マンションロッテの一連の作品」



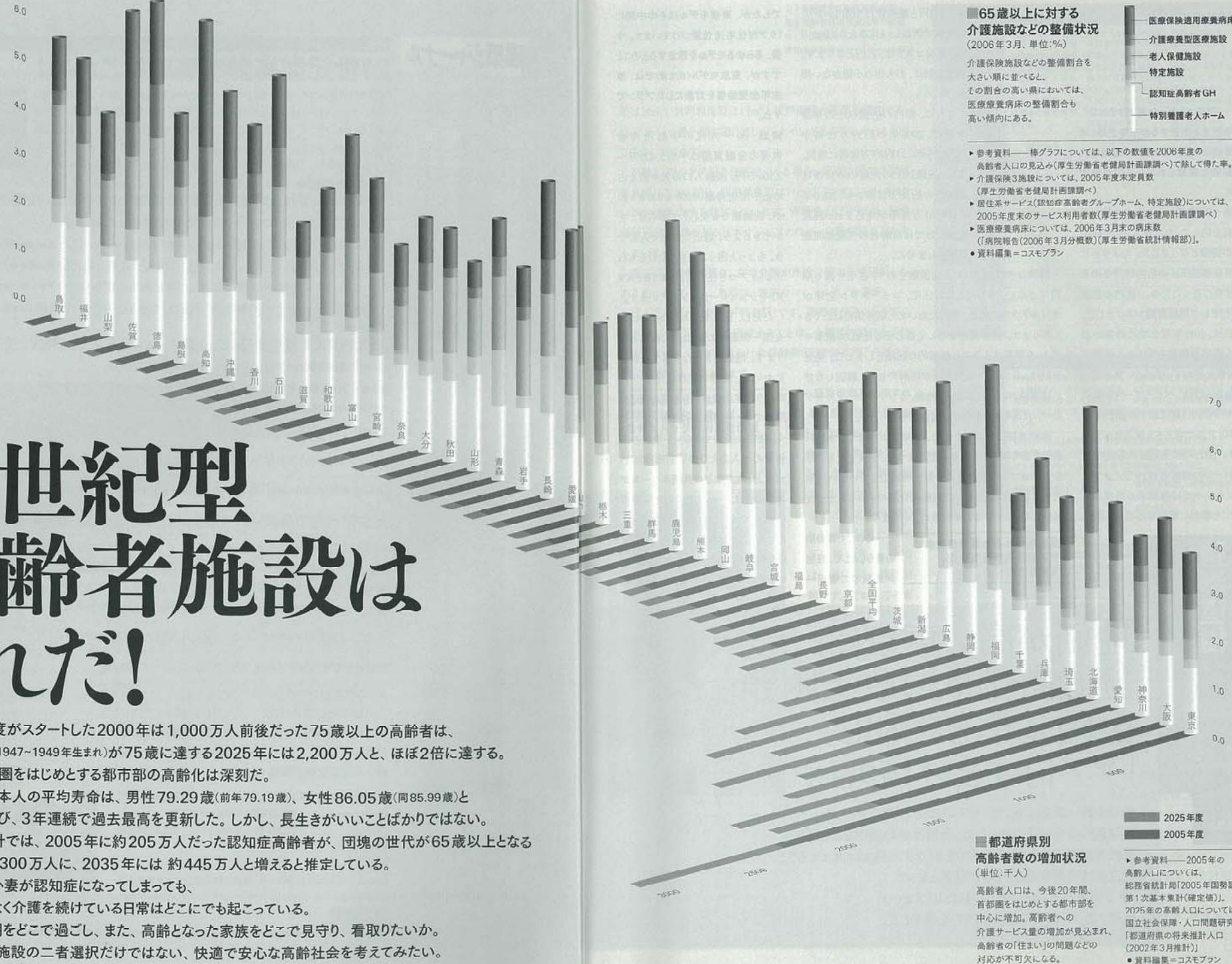
モダニズム建築の
メッセージ
**国際建築といふ
方法の現在形**
|| 松隈洋

松隈正恒の遺した一輪の花である日土小学校は、忘れられた国際建築に込められていた方法の現在形として、その具現化された空間として、そして、何よりも、子供たちと地域の核として再生し、普段づかいされる遺産として、今まで、新しい時間を生き始めようとしている。

特集

21世紀型 高齢者施設は これだ!

介護保険制度がスタートした2000年は1,000万人前後だった75歳以上の高齢者は、団塊の世代(1947~1949年生まれ)が75歳に達する2025年には2,200万人と、ほぼ2倍に達する。中でも、首都圏をはじめとする都市部の高齢化は深刻だ。
2008年の日本人の平均寿命は、男性79.29歳(前年79.19歳)、女性86.05歳(同85.99歳)と男女ともに伸び、3年連続で過去最高を更新した。しかし、長生きがいいことばかりではない。厚生省の統計では、2005年に約205万人だった認知症高齢者が、団塊の世代が65歳以上となる2015年には300万人に、2035年には約445万人と増えると推定している。
年老いた夫か妻が認知症になってしまっても、他に方法がなく介護を続けている日常はどこにでも起こっている。自分の高齢期をどこで過ごし、また、高齢となった家族をどこで見守り、看取りたいか。在宅それとも施設の二者選択だけではない、快適で安心な高齢社会を考えてみたい。



閉鎖したホームセンターを 地域密着型の総合ケアセンターに。 高齢者を支える拠点は、 地方のまちにあり!

総合ケアセンター

榛名荘

設計者|水野直樹
(コスモプラン一級建築士事務所代表)

設計者として、高齢者の暮らしをどう支えるか。常にそう自問し、医療・介護施設の設計を手がけてきたコスモプラン。医療法人や施設職員、入居者の声に精通し、地域再生も視野に入れた高齢者施設づくりを提案している。

——水野さんが、厚生労働省・総務省のデータを元に編集された「都道府県別介護施設等の整備状況」(P2~3)は、厳しい現実を示していますね。

水野 人口動態から見れば、高齢者は今後、都市に集中しますが、受け皿となる施設が圧倒的に不足します。例えば東京都の医療・介護施設が対応できるのは、高齢者人口比に対して4%にも満たない(2006年時点)。東京、千葉、神奈川の首都圏が全国の最下位3位を占めています。一方で、すでに高齢化率が高い地方では、都市に比べ施設が多い。ただ、全国的に見れば、高齢者の行場はありません。全国平均でも5%程度です。特に、今後、団塊世代と団塊世代ジュニアが高齢者層となる

頃、深刻な事態となります。

今後、都市では高齢者施設を建設することはますます困難となるでしょう。一番の問題は、土地がないことです。高騰する地価や、「まちづくり3法(都市計画法、大店立地法、中心市街地活性化法)」といった土地利用の法的規制などが理由です。

高齢者施設は、介護保険制度の枠の中で整備されていることが大きい。しかし、かつてのように建設費の大半が補助でまかなわれる時代ではありません。介護報酬は都市も地方もほぼ同じなので、地価の安い地方の方が事業として有利です。

ただ大きな視野で見れば、都市計画の専門家として自戒するならば、これまでの都市計画全体が、人



みづの・なおき|1983年東京芸術大学大学院修士課程修了(環境設計課程)。環境設計研究所勤務を経て、1995年コスモプラン設立。現在、医療・介護施設を軸に設計を手がける。特に療養病床転換(医療)、個室ユニット化(介護)、地域ケア(まちづくり)に力を入れている

工的な都市集約型の社会をつくりすぎてしまった。若者は故郷を捨てて都市に集まり、高い報酬の仕事を得る。しかし、都市は地震などの天災やテロなどの危機にもろい。そうした所に人口が集中し続ける状況を放置したままだと、日本は絶対おかしくなると危機感を抱いています。

高齢者施設が都市でつくれなければ、地方につくり、人を移ればよい。都市に出た人たちが、故郷にUターンやJターンを促すのです。

大規模「収容所」を解体し、 地方のまち中に「点在化」を

——データでは、地方は都市に比べて、高齢者施設が充実しているということですが。

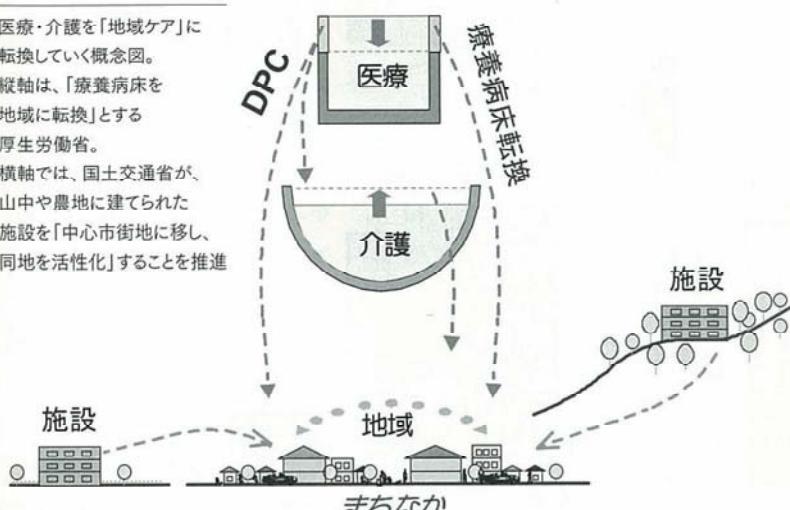
水野 地方では、地元の社会福祉法人などの独壇場で、税制面でも

優遇されています。そのため、独善的に施設建設の認可を受け、施設の内容も従来型の大規模で画一的なものになります。また、外部からの民間会社の参入をこぼみ、入居者側のニーズをつかもうとする発想も競争力も持ち得なかった。しかし、流れは変わっています。

かつて、地方の高齢者施設は、山の中や農地などに大規模な施設が建てられてきました。私に言わせば、それは入居者を社会から隔離する「収容所」に他なりません。

ある医療法人は、設計段階で、「小学校の通学路を施設前に持ってきてほしい」と校長先生に依頼し

医療・介護を「地域ケア」に転換していく概念図。
縦軸は、「療養病床を地域に転換」とする厚生労働省。
横軸では、国土交通省が、山中や農地に建てられた施設を「中心市街地に移し、同地を活性化」することを推進



たそうです。黄色い帽子を揺らして登下校する小学生の姿を見守ることを高齢者が楽しんでいるからです。施設はまちに開かれているべきです。

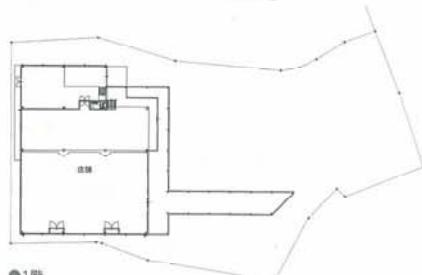
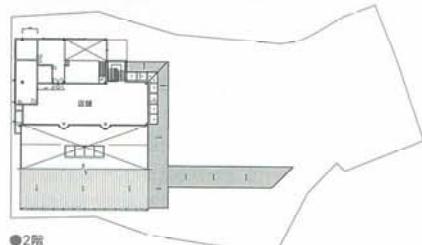
人口5万人以上の方都市であれば、中心市街地があります。中小規模施設を点在化して建てる「群島配置」の手

法が有効だと思っています。学生の頃、森村道美先生(当時、東京大学工学部都市工学科教授)から学んだのですが、「地域を変えるには、大規模で面的に開発するのではなく、点と点を有機的に結んだ線的な関連性を大切にすること」です。事業者側は、コストをかけず地域全体をカバーすることができ、利用者にとっては自宅から近く利便性が高くなります。また、建物の規模を小さくすることで、暮らしのある「住まい」「家」となります。最近は、現場の行政職員も、同じ問題意識を共有し、さらに、国交省、厚労省も政策誘導しているところです(P13)。

交流の場としてのケアセンターが、
まちを活性化する
——群馬県高崎市
の「総合ケアセンターラン名荘」は、市中心市街地の既存施設をコンバージョンし、地域活性化の役割も担っていますね。

水野 標名荘は、病院を母体とする地元の財団法人標名荘の斎藤直躬専務理事より、「閉鎖したホームセン

■コンバージョン前



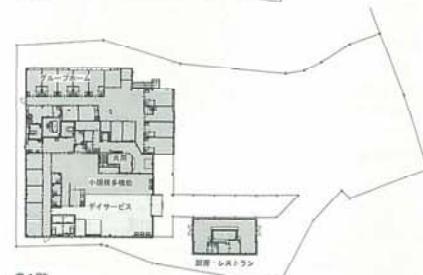
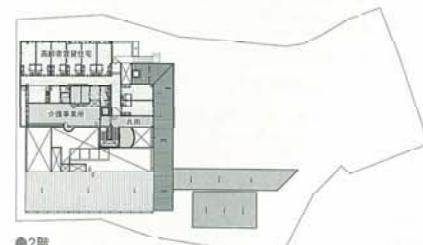
左 | ホームセンターの外観はそのまま残した総合ケアセンター様名荘
上 | 1階のデイサービスセンター。
天井が高いので空気がでもない。
円陣を組んでゲームに興じる高齢者。
右手は浴室。左手はトイレに通じる
下 | グループホームの居室。畳敷きにベットが置かれる。窓の奥には耐震補強のプレスが見える

●建築概要

所在地／群馬県高崎市
建築主／財団法人標名荘
設計／コスマプランニング建築事務所
延床面積／1,000m²
構造・規模／S造・地上2階
竣工／2006年9月



■コンバージョン後



出入口横のベンチでくつろぐ職員と
利用者の高齢者。認知症というが、表情豊か

「上がっておいでよ」と手を振る光景も見られます。人を管理し閉じ込める空間ではなく、施設内外の人が交流しやすい空間になったと思います。

2007年4月には、標名荘の近くに旧JA支所の建物を借り上げて改装し、「元気アップ俱楽部はるな」を4月にオープンしました。2階に健康センターを設け、高齢者の介護予防や中高年の健康運動を行います。1階は、高齢者住宅(定員5名)と針灸マッサージ院を設置。標名荘の入居者や職員が気分転換をかなえて、センターを利用するそうです。

2006年のスタート以来、標名荘は、病院も含め、施設の点在化で「群島配置」の一つを構成し、地域復興、雇用創出の場ともなっています。地元の公立高校の先生から、廃校の危機に直面した学校の存続をかけて何か特色を持たないかと相談があったそうです。そこでヘルパー養成授業が開設されることとなり、標名荘の所員が講師として派遣され、また、生徒が実習に来て、実地に介護を学んでいます。

『ル・ボ』 敷地内外の誰もが利用できる 「公の場」としてのレストラン

標名荘の玄関脇では、利用者、職員、地域の人が入り混じって、地域の烟でとれたジャガイモを袋詰めしている。訪問者に無料で配るという。

旧・標名町役場にほど近く、はるな街道沿いにある標名荘は、まちの中央に位置し、交通の便がよい。12台入る駐車場は、介護スタッフの車が常時出入している。祭りになれば、まちの神輿でぎやかな空間にもなる。

しかし、斎藤専務理事は、「耐震補強してもコンバージョンを。その方が利用者も安心するし、宣伝になる」と言われました。既存を生かしたのは構造体のみで、内装、外装は一新し、1,500万円かけて耐震工事も行いました。ただし、新築よりもコストは抑えられました。

外観の形はそのままです。内部では、1階のデイサービスセンターは、ホームセンターの大空間を生かし2階天井までの吹き抜けだ。2階の居室の入居者が、1階の入居者に、

——地域の若者が施設を支える流れ
ができますね。

水野 先日ある若者から「ここで働きたい」と書いた手紙が法人に来たそうです。私は数年、このまちを離していましたが、ここに戻って標名荘を知りました。外の世界を見て、自分の生まれ育ったまちへの愛着に気づき、恩返しがしたいと考えからです」と。それを読んで専務理事は本当に喜ばれました。やはり介護職員を集めるのは大変なことですから。

医療・介護現場で働く若者は、地方に残ることは、何か後ろ向きな気持ちを抱きがちです。ですから私は、若い職員に「東京の有名大学に進学して地域から離れる人より、本当の仕事をしている」とよく言います。するとみなさん、顔が一変して輝きます。

高齢者と職員が、席を並べてテレビに見入る。

2階は、高齢者専用賃貸住宅「せきらい」が8戸。現在全室満員で、すべての人が施設内のサービスを

利用している。家賃は食費・光熱費込みで10万円前後。廊下を隔たず横には、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所らのスタッフルームが一室に入所している。

標名荘の利用者は、専門スタッフと相談しながら、個々人の状況に合わせた多様なメニューを選択でき、きめ細かく質の高い高齢者支援が受けられると評判だ。

敷地内にある厨房・レストランは、入居者・利用者、一般市民が気軽に利用できる交流の場になっている。

総合ケアセンター標名荘事務長・菅原優氏は、レストランの位置づけを説明する。「近所の子たちも遊びに来ます。利用者や家族が、職員への意見をふともろして、近くに居合わせた職員が聞いてしまうこともあります。しかし、私たち、施設が外部に開かれた『公の場』をいかにつくるか、ということが重要だと考えています。『静義たまゆら』の火災の一端は、

地域から閉じ、密室化してしまったことで起きていたのではないでしょうか」。

はるな街道味処「あいあい」。カレーライス380円、手作りピザ400円と地元食材の軽食、ドリンクなどメニューは豊富に出されている。

地元の人は、「総合ケアセンター・標名荘」を、「あいあい」と呼ぶ人が多いという

